

第4章

男と女

女のいない町

慣れてしまえば何でもなのだが、サナアの風景のなかには女がいな
い。特に大通りでは、女性の姿はほとんど見かけない。もちろん、イエメン
に女性がいらないのではない。むしろ一九七〇年代半ばから八〇年代末までの出稼ぎブームの間
は、男は大挙してサウジアラビアに出稼ぎに行っていたので、国内に残っている人口の男女比
は四対五くらいの割合で女のほうが多かつたくらいである。

女性はいるのである。しかしイスラムの教えでは、女は夫と親兄弟以外の男に素顔、素肌を
見せてはいけないことになっており、敬虔なイスラム教徒であれば、この教えに忠実に従おう
とする。そこでイエメンでは男の世界と女の世界がかなり厳密に区別されている。この結果、
男の世界である表通りではほとんど女性を見かけられず、サナアは「女のいない町」であるか
のように見えるのである。特に異邦人（異教徒）で、かつ男である者にとってはとりわけその
印象が強い。

同じ女性どうしでも、町なかで同性の素顔を見る機会のないことは男性とほとんど変わらな
い。表通りをぶらついている女性はそもそも多くないし、たまにいても彼女らはベールを被っ
ている。どんなに親しい人と出会っても町なかでベールを外して挨拶することなどめつたにな
い。

男と女の世界を分離するのはけしからんという意見もあるだろう。だが、われわれにしても

男女がすべての場を共有するとなると不都合を感じることもあってある。例えばトイレ、それに銭湯。銭湯に男湯と女湯があるのは、一緒に入浴すると不都合だと思われるからであろう。ではなぜ不都合か。裸だからである。なぜ裸が不都合か。恥ずかしいからでもあり、また隠すべきところが隠されていないので間違いが起こるかもしれないからである。つまり隠すべきところが隠されていない場合、男と女が一緒にいるのは不都合なのだ。だから男と女の空間を分けるのである。

すると問題は何が「恥ずかしいこと」で、「隠すべきところ」とは何か、である。これは文化によって、時代によって異なるのである。現在の日本ではプールが混浴であることをみれば、水着で隠している部分が最低限の「隠すべきところ」だと考えていいのだろう。しかし日本でもピキニが登場する以前は女性のおへそは「隠すべきところ」だったし、ミニスカートが流行するまでは「膝小僧」も「隠すべきところ」だった。

かたやイスラム世界では、現在でも女性の腕、足、顔は「隠すべきところ」なのである。だから、外を歩くときは衣服の一部として頭からすっぽり被りものを被るのである。しごく当然のことではないか。それにベールはかなり薄い生地できていてるので被っている者は外がよく見え、女性の側からすれば外界から遮断されているという感じではないようだ。むしろ相手から自分を遮断するためのものなのだ。サングラスと同じである。



黒づくめの女性。女性に見とれて歩いてい
るとマンホールに落ちるよ、という意味らしい。
(出所) *al-Thaura* 紙, 1987年10月28日。

「でも男は顔を出していいのに、女がダメなのは不公平」という意見もあるだろう。しかしこれも程度の問題にすぎない。日本でも女性がトップレスで町なかを歩いたら相当びつくりされるが、男が上半身裸でも夏なら許されるではないか。イエメンで顔を出して歩くことと、日本でおへそを出して歩くことが、おそらく女性の「はしたなさ」の程度としてはいい勝負である。イエメンにいる外国人の女性は顔を出しているし、イエメンでもたまに顔を出している女性がいるので、現在のイエメン社会ではここまではとりあえずぎりぎりの許容範囲と認められていると考えてよい。

しかし、仮に外国人であっても女性が半袖やミニスカートを歩くことは、現在のイエメンでの道徳的な許容範囲を越えており、ほぼ日本におけるトップレスと同じような衝撃を周りに及ぼす。ましてや外国人の女性がタンクトップなどで歩くものなら、若い男たちは食い入るように視線

をくぎづけにするだろうし、敬虔なじいさんなら驚きと嘆きのあまり卒倒してしまうかもしれない。「外国の女というのはなんてはしたないやつらなのだろう」と言われたくなければ、サナアでは長袖、ロングスカートを勧めする。

さて、表通りと仕事場は男の世界であったのだが、女性の社会進出が進むのが世界の趨勢である。サナアでも男に混じって働く女性の姿は外国企業の秘書、役所や銀行の事務方などとしてぼつぼつ見かけるようになっていく（旧南イエメンの首都だったアデンでは女性の社会進出は格段に進んでいるが）。とはいえ女教師には、まだまだエジプト、スーダンなどからの出稼ぎ教師が多い。看護婦は大半がインド人、フィリピン人である。イエメン航空のスチュワーデスにもイエメン人は二三人しかおらず、あとはエジプト、フィリピンあたりからの出稼ぎ組である。

現在、一般の職場に進出している女性は、上から下まで黒づくめのアバーヤで体を覆っていて、顔にもベールを被っている。男女の空間を分けることが不可能な場合、イスラムの教えに従おうとすれば、女性は自分自身でことさらに自分の周りの空間を遮断して女の空間にする必要があるのだ。

女性のいない町の風景も、見慣れれば自然なものに感じられ、別に奇異だと思わなくなってくる。日本に帰ってきた当初、車に乗っても歩道を歩く女性たちの腕や足の白さがやたらに目について反射的にわき見ばかりしてしまうので、ぼくはしばらく運転できなかったものである。

アイブ

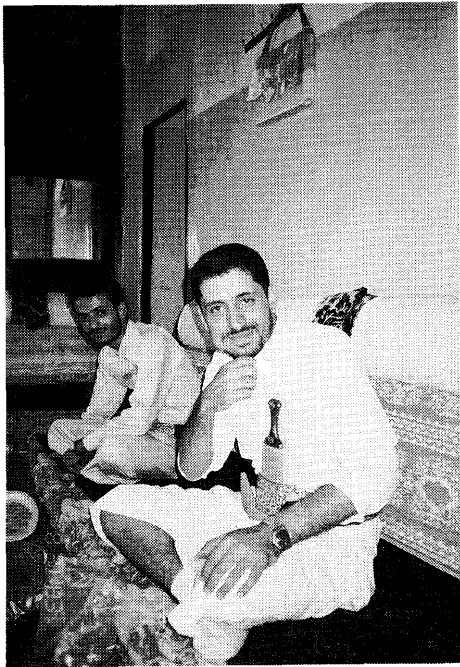
イエメンで写真を撮るときには、その被写体を撮影してもいいかどうかあらかじめ許可を求めなければならぬ。しかしはじめから撮ってはならないことが明らかで、「軍事関連施設」である。これは国家の治安、安全保障に関わることであるから写真を撮ることはタブーである。中東諸国では一般にこうした「国家機密」の範囲が広い。

そしてもう一つのタブーは女性であり、女性の写真を撮るのは「アイブ」である。アゴ髭を下から親指と人差し指でつまむのが「それはアイブだ」という仕草だが、この仕草は、侮蔑と憤りをこめてなされることが多い。アイブの対象となるのは、イスラムの戒律を守らないこと、社会規範から逸脱すること、子供が親の言うことをきかないことなどである。男の場合、卑怯なこと、臆病なことアイブの対象である。

そして自分の身内の女性の写真を撮られることは、イエメン男性にとっては、彼らの名誉を著しく傷つけられることになるから「アイブ」なのである。すなわち女性の写真を撮るのも「アイブ」なら、女性の写真を撮られるのも「アイブ」なのである。日本語の「恥」の概念にかなり近いと考えてよい。

イエメン人は男女同権論者ではない。男には権利も多いが義務も多い。とりわけ自分の保護下にある女（妻、姉妹、娘、姪）を守ることは重大な義務であり、これができなければ一人前

女性が親兄弟以外の男に素顔・素肌を見せてはならないという掟は、すなわち親兄弟以外の男からの視線を素顔に受けてはならないということを意味する。このため女性は自衛策として、町なかでは体をすっぽり覆う上衣（アバーヤ）やベールなどを着るのである。それでも視線が



アイブのしぐさ

の男とは言えない。男の沽券に関わる問題なのである。女を守るといっても、いろいろある。まず物理的に危害を加えようとするものがあれば、敢然と立ち向かわなければならぬ。これは日本人だとして同じである。しかしイェメンでは他人の「視線」からも女性を守らなければならぬ。とりわけ異教徒の男の興味本意の視線は、特別注意深く避けなければならない。

投げかけられることはあるだろう。ベールがあるので素顔・素肌を見られる恐れがないとはいえ、興味本意の視線が向けられるのは事実である。この視線を防ぐのが男の役目である。女にはこれを防ぐ手だてはないのだから。

「肌の露出の禁止」はイスラムの戒律だが、「他人の視線の忌避」はおそらくイスラム以前の南アラビアの文化を引き継いでいるものだろう。アラブ世界全体に言えるが「邪視（妬み、そねみなどの悪意を含んだ視線）」を恐れる習慣が根強く存在する。だから女性の写真を撮られるのは、このイスラムの戒律とアラブの文化の二つの要素が混じりあつていつそう嫌がられるのである。写真はただの視線よりも悪質である。写真を撮られてしまえば、その瞬間の視線もさることながら、フィルムが現像されたあかつきには、どこか知らないところでさらに多くの人の視線にさらされることになるのだ。素顔を出していようがいまいが、ベールを被つていようがいまいが同じ。問題は向けられる視線である。

一方、異邦人の目からみると、神秘のベールを被り目だけを出している姿は、素顔を出しているよりもよりいっそうエキゾチックで、ついつい目を奪われてしまう。そして撮ってはいけないと言われているもついつい撮りたくなるのが、人情である。しかし通りすがりのそうした女性にカメラを向けたとたん、周囲の家の中から何人かの男が険しい顔で飛び出してきて、「撮るな」と言うだろう。あるいはレンズの前に手を広げるかもしれない。それでもなおシッ

ヤターを押したりすれば、男はへその前のジャンピニアを抜くかもしれない。ことは重大なのである。たかが写真ごとくと軽くみてはいけない。男の沽券に関わることなのだ。

自分の保護下の女を守れない男、守ろうとしない男は腰抜けである。男の義務を果たせないことは恥、すなわち「アイブ」である。親類の女が他人の目に曝されることを防がねばならぬのはもちろんだが、自分に縁もゆかりもなく単に家の前を通り過ぎた女であっても、彼女が異教徒の視線に曝されるのを放置するのは「アイブ」である。周りに彼女の親類がいなければ、同じイエメン人として彼女は一時的に「自分の守るべき女」と解釈される。だからやりかけの仕事を放り出してでも、飛び出してくるのだ。

「本人がいやと言ってるわけじゃなし、構わないじゃないか」「減る物じゃなし」というような反論は通用しない。女にはそもそも防衛能力は完全には備わっていないのである。女がどう言おうと、守るのは男の義務であり、本人の意志は無関係である。

それに「減る物じゃない」なんてことは、イエメン人には承服できない。イエメン人には「邪視」にはそれを向けられた人の運命を不幸にする力がある、と信じている人が多い。だから生まれたばかりの赤ん坊のような弱い者は、ことさら邪視には気をつけなければならず、へたをすれば命に関わることもある。女性も弱い者であり、それゆえ邪視から守らなければならぬのだ。

ときには、本当にこちらに女性を撮るつもりがなく、建物や風景を撮っているのに、たまたまそこに女性がいたためにクレームをつけられる場合もある。そういうときは、ともかく「モスクを撮ってんだ。女性を撮るつもりなんてまったくくない」と弁明し、悪意のないことを強調し、かつすばやくカメラをしまうことである。ぐずぐずしていて、話がこじれるとフィルムを抜き取られることだつてある。

日本のテレビ局がイエメンを特集（NHK「海のシルクロード」——放映は一九八七年四月）したとき、そのロケにほくも同行した。長いロケーションで国内各地を回り、サナア旧市街の隅の小さな野菜スーク（市場）のあたりで最後の録画撮りをした。

最後のカットを無事撮り終わり、ディレクターが「万歳！」と帽子を空に放り投げた瞬間であつた。真つ赤なトマトが彼をめぐけて一直線に飛んできたのだ。道ばたで店を広げていた野菜売りのおばちゃんが投げたのである。われわれは店先の野菜を撮つたのであつて、彼女を撮るつもりはまったくなかつたし、おばちゃんのほうは黒づくめだし、それほど魅力的な被写体ではないのである。でも、彼女はイスラム教徒である。誇り高きイエメン女性なのである。彼女に断らずに彼女の売りものを撮つたのはこちらの落ち度であるし、彼女が自分が撮られたのかもしれないと思うのももつともである。

少し離れてこの光景を見ていたぼくは、今でも真つ赤なトマトが空中を飛んでいく光景が目

に焼きついている。いかにもイエメンでのロケーションらしい幕切れであった。でもトマトでよかつたのである。たいていの成人男子がライフルを持っているこの国では、弾丸が飛んできても不思議はないのだから。

買い物

イエメンの山道を自動車で旅行していると、男が手ぶらで歩いていて、その後から女が頭の上に薪を満載して歩いている、という夫婦とおぼしき男女にすれ違うことがしばしばある。外国人の女性がこれを見れば「なによ、えばっているばかりで自分は楽をして。力仕事ぐらい男がしなさいよ」と憤慨するのは必至である。確かに薪を運んでいる女性には同情したくなるが、何が男の仕事で何が女の仕事かは、本人たちの決めることである。力仕事は男の仕事、というのはわれわれの思いこみにすぎないかもしれない。

もちろんイエメンでもだいたいにおいて力仕事は男の仕事である。しかし、薪拾いは女の仕事なのである。今たまたま手が空いているからといって、男が女の仕事をするのはアイブ（恥）である。よそ者が文句を言う筋合いではない。

役割分担などという理屈を持ち出すと、たいてい女性に不利にできているから、容認しがたいと言うフェミニストの主張は一応もつともだが、全部が全部女性に不利というわけではない。よその世界では一般に女性の仕事だと考えられているが、イエメンでは男性の仕事と考えられていることが一つある。それは、買い物である。

女性は、他人の男のなかに混ざっていかないことが美德である。そのために男は自分の保護下の女を他人の視線から遮ろうと最大限の努力をしている。それなのに、買い物になど出かけたら、日頃の苦勞が水の泡になってしまふ。スークにはよそ者がうようよしている。よそ者がたくさん来るからこそ、互いに必要なさまざまな物品が交換されるのである。よそ者がいるとわかっていると、女を送り出すわけにはいかない。となると、買い物は男がするしかない。だから田舎の曜日市（スーク）に出かけるのは男だけである。

町に住む若い夫婦のなかには行けるものなら妻が買い物に行ってもいいと考えている人もいる。しかしスークやスーパーマーケットは、家から歩いて行ける場所がない場合が多い。車に乗らなければならぬのだが、運転できる女性はほとんどいないし、



午前中のスークで昼食の材料を買う男たち（撮影・小平恵一郎）

他人と同席する乗合タクシーにも乗らないに越したことはない。だからやはり買物物は男の仕事である。

毎日の料理をするのは女性でも、材料となる野菜も肉も缶詰も、生きたままの鶏も、食糧はほとんどすべて男が買って帰るのである。ジャンビアをさして、あご髭を立派にはやした男が、スーパーで買物のかごに缶詰と冷凍チキンと女性用のシャンプーを入れ、ティッシュ・ペーパーと紙おむつを両手に抱えている姿というのは、なかなかほほえましい。

買物客に女がいないように、スーパーでも旧市街のスククの店でも売り子はすべて男である。女性の店番などいない。もともと小さな女の子は、店番もするし、近所にジュースを買いにお使いに行ったりはする。

女性はレストランにも行かない。ペールを被ったままでは食事ができないからである。他人に顔を曝さないでものを食べるのは魔法でもなければ無理である。だから女性の外食はありえない。また、普通のレストランにはウエイトレスなど存在しない。レストランも男の世界である。

サナア旧市街の門を入ってすぐのあたりにだけ、女性が店を広げている一画がある。店と言っても道ばたに品物を広げてしゃがんでいるだけなのだが、そこでは野菜や彼女たちが焼いたパン（ホブス）を売っている。また、紅海沿岸（ティハマ）地方の素焼きの香台やつぼを売っ

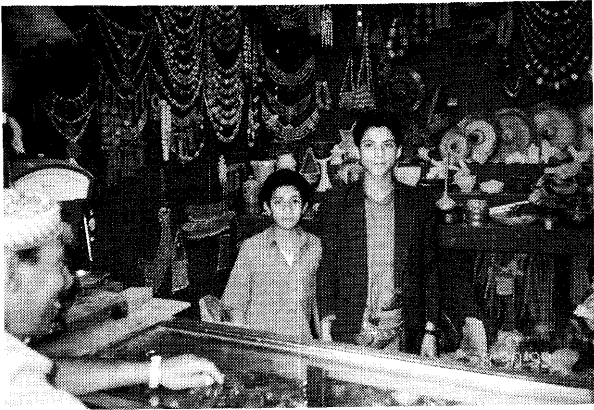
ていることもある。彼女らの多くは、肌の色が黒いアフリカ系である。彼女らも、れっきとしたイェメン人だが、肌が黒い人々はえてして社会的に低い階層とみなされがちである。そして、低い階層の女性であれば、スークに出でくことも容認される。それはアイブには当たらないのである。

だからこそ、男はいくら忙しくても自分の妻や娘をスークに買い物に行かせることはない。それは、自分の社会的地位を低めることになってしまうからである。どうしても自分で行けないときは、兄弟や従兄弟や、叔父に頼めばいいのである。そもそも、女を一人前とみなさない傾向のある男たちは、女に金を預けることを好まない。

例外的に、女性の買い物姿をいつも見られる場所が一家所だけある。それは、金、銀などの装身具屋の店先である。こればかりは父親やおじさんや夫の



午前中のスーク。頭の上に自家製のパンを乗せて売る女性。この「風呂敷」スタイルはサナアの名物である。



銀スークの店と店番の兄弟。伝統的な装身具は銀と琥珀と珊瑚である。左隅に銀の目方を測る秤がある。

見立てでは信用できないのだろう。新市街では「ナセル通り」、旧市街では「銀スーク」と呼ばれる一画が女性の装身具を一手に引き受けている。イエメンではもともと装身具は銀が基本であった。ネックレスからブレスレット、指輪、イヤリング、足輪、胸飾り、ベルト、頭飾りにいたるまで、身体中に銀をまとうことが女の幸せの象徴であった。装身具は結婚のときに婚資の一部として夫から贈られたり、母から譲り受けたりするのだが、女性の装飾品は結婚してもすべて個人の資産と考えられており、処分の権利もすべて自分にある。

銀本位制の貨幣体系をとってきたイエメンでは、銀の装身具には貯蓄の役割もあり、余裕のある場合にはどんどん買い足すのである。逆に事情があつて物入りとなり、自分の装身具を売ることもしばしばである。田舎からサナアの銀スークまで出

てきて、手持ちの銀を売って家計の足しにしようとしている女性も多い。銀屋の店先で大事そうに自分の持ってきた銀製品を見せ、「うちでは買わないよ」と言われてすすごと隣の店に行く女性の姿には哀れを誘うものがある。

一九七〇年代の出稼ぎブーム以降は、イエメン中で金回りが良くなったので金製品の人気が上がっている。今では結婚のときのプレゼントは銀よりも金が喜ばれる。中近東全体に言えることだが、イエメンでは二二金が主流で、日本の一八金に比べて金の色に赤みが強い。イエメン女性の身につけている金の量はバカにできない。価格は世界の金相場に連動して毎日変動し、加工の巧拙やデザインに関わらず、目方で勝負である。だから、金屋の店先には立派な秤が据えてある。

金屋では女性の素顔を見るチャンスが高い。女性が品定めのためにベールをまくって金を眺めるからである。金製品を見ているときは金の輝きの前に夢中となり恥じらいを一瞬忘れてしまっているのである。女性が貴金属に弱いのは万国共通である。

荷台

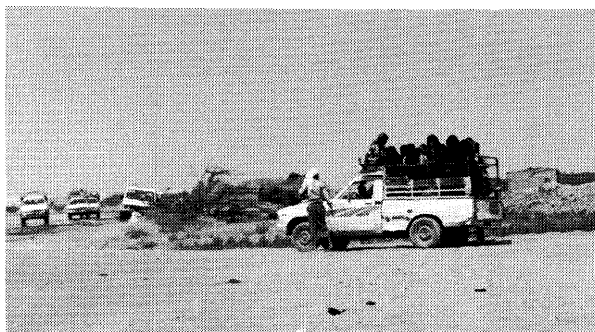
田舎では、村のなかでの用事は歩いて済ませられる。村人はほとんど身内だから、家の近くなら外でもベールを被る必要はない。しかし、サナアにはよそ者や外国人がたくさん歩き回っているから、一歩でも家から出るときはベールをすっぽり被る必要がある。またおしゃべりのために友だちや親類を訪ねるとしても、彼らが近所に住んでいるとは限らない。

女性の足で歩いていくには遠すぎる場合もあるし、歩ける距離でも、途中でいろいろなよそ者と遭遇する機会が増えるので、できれば車で行きたい。

お隣のサウジアラビアと違ってイエメンでは法律上、女性も運転することができる。しかし実際にはサナアで車を運転している女性を見るのは珍しい。そこで、外出する場合は乗合タクシー（ダッバーブ）に乗るか身内の男性に送ってもらうかしかない。男の側から言うと、身内の女性をダッバーブに乗せるのはあまり名誉なことではない。そこで車を持っていれば、女性を運ぶのは男の役目となる。

男たちがカートに興じている間、女は家の中でじっと我慢してばかりいるとは限らない。女にだって友人とおしゃべりをする権利はある。若い世代の夫婦になるほど、「あんたばかり遊んでずるいわ」という奥さんも増えてくるだろう。毎晩見ているエジプト製のテレビ番組ではいつも女が亭主を罵倒しているから、この影響を受けるイエメン人の奥さんも出てくるだろう。そこで、男たちが大手を振ってカートを嘯むためには、その間かみさんたちもどこかで遊ばせておくにかぎる。

今では電話という便利なものがあるから、女どうしで今日はどこに集まろうという相談ができる。そこで、男は自分たちがカートに行く前に、妻や子供たちを乗せて女のたまり場になる家まで運んでいく。場合によっては近所の女たちも乗せてやり、にわかタクシーになって町な



荷台に満載の女たち。これは金曜日の光景なので、おそらく結婚式に向かうところであろう。

かを走ることになる。これは、午後の早い時間、つまりカートが始まる直前の時間帯によく見かける光景である。里帰りのときもそうだが、こういうときに座席の多い車は重宝である。そこで、日本製の四輪駆動車がもてはやされる。ワゴンタイプで乗車定員は一〇人だが、女子供だけなら一五人は乗せられる。それにこれなら女たちを他人の目に触れさせないで運べるのだから理想的である。だからイエメン女性はランド・クルーザーが好きなのだ。

しかし田舎では車はロバの代わりであり、農産物や都市から買ってきた荷物などの運搬が主要な用途であって、女を運ぶのが主目的ではない。そこで田舎では車はピックアップタイプ（つまりトラックである）のほうが望ましい。それにこちらのほうが安いのである。ここでも圧倒的なのは日本車で、トヨタのハイラックス（イエメン人はこれをヒーラックスと呼ぶ）と日産のダットラ（ダッ

トサン・トラック)が人気である。主な用途は荷物の運搬だが、ときには荷台に女がしがみついている光景に出会う。田舎の道は未舗装でガタガタだし、舗装してあってもヘアピン続きのくねくね道を飛ばしているの、荷台の女たちは振り落とされそうになっている。これまた外国人女性が見たら「女をなんだと思ってるの」「荷物とおんなじに扱わないでよ」と怒るのは間違いない。

しかし、彼らにも言い分はある。仮に隣り村に行く必要のある三家族がいるとしよう。そのうちの一家族の主人が「ヒーラックス」を持っている。そして各家族に一人ずつの妻と二人ずつの子供がいる。さてこの場合、誰が前の座席に乗り、誰が荷台に乗ることになるか。

前の座席には運転手も含めて大人三人が座れる。運転手はこの車の持ち主であり、男である。あと二人は誰にするか。賢明な読者ならおわかりと思うが、当然残る男二人である。つまり、ここは男の空間になる。乳飲み子がいれば、たぶん父親にだっこされて前の座席に納まるだろう。残る女三人と子供たちは、荷台に乗りたがる。なぜならここは女の空間になり、おしゃべりに興じられるからである(揺られながらもおしゃべりはできる)。こういうわけで「女は荷台」という結果になるのであって、けっして女を荷物扱いにしているわけではないのである。とはいえ、イスラムでは女を一人前の人間として扱っていない場合も多く、コーランでは女は男の半人前として扱われている。遺産相続などの場合がそうである(しかし、これは女にも

相続権が認められているという点では評価される)。また、何かの事件の証人としても、男なら一人でよいものが、女なら二人いないと証拠としての価値がない。こういう話はほくもイエメンに住むようになる前に聞いたことがあり、そんなものかと納得していた。しかし、さすがに保険の話には驚いた。

自動車による死亡事故の場合、保険会社はその賠償金の額をあらかじめ決定している。死亡時の賠償金をアラビア語で「ダイヤ」(血の代償)というが、その額は保険の約款によると「死亡あるいは、両手、両足、両目を失った場合は九万六〇〇〇リヤル」とあった。なるほど、両手、両足、両目を失ったら死亡と同じダメージだと言うことだな、と理解した。次に「片手、片足、片目を失った場合は四万八〇〇〇リヤル」とある(一九八六年当時)。なるほど、そういう計算になる。そのあと肘から先ならいくらとか、手首から先ならいくら、指一本ならいくらとか細かい規定が続くのであるが、まあそれなりに筋の通った計算基準であった。しかし最後に「女の死亡は四万八〇〇〇リヤル」とつけ加えられてあった。女の命の値段は男の命の半分なのである。これには参った。

イスラム法廷で女の権利が男の半分であるのは仕方がないとして、自動車保険はいわばイスラム法(シャリア)に規定のない近代的民事である。にもかかわらず女の命が男の片腕とおんなじなんて、ちよつと悲しい。もちろん保険料は現実に行われている習慣を反映しているの

だからやむを得ないと言えばやむを得ないし、実際に支払わなければならない額は確かに男の二分の一相当なのだから、保険会社としてもわざわざ多く払う必要はないのだが……。

その年の暮れに保険会社から「ダイヤ（死亡賠償）の相場が二四万リヤルになったため、保険料の追加支払をお願いします」という手紙がきた。命の代価も値上がりしている。それでも女の死亡賠償額はやはり半分のみである。

荷台に乗った女性たちが交通事故に合わないよう祈るのみである。

酒

マンストールは警察官である。ぼくが旧市街の結婚パーティーにまぎれ込んでジャンビーア・ダンスを初めて踊ったときに、隣に座って英語で話しかけてきたとても愛想の良い男であった。彼にステップを教えてもらいながら、狭い部屋の中で「花一もんめ」のようなジャンビーア・ダンスを踊ったものだ。

熱気と水パイプからたちのぼるタバコの煙でもうもうとした部屋から抜け出して、隣の部屋で涼んでいるときにも、物珍しがるわれわれに何やかやと説明してくれたのがマンストールであった。夜中の十二時に花嫁が父親や親戚一同に連れられて車でパーティー会場に乗り込んできたとき、ぼくらは到着した花嫁一行を三階の窓から写真に撮ってしまった。これに花嫁側の男が抗議したとき、ぼくらのために抗弁してくれたのもマンストールだった。さつき出会ったばかりなのに、なんて人のいい奴なんだろうと感謝したものだ。



サナア旧市街の結婚パーティー。正面奥が花婿。中央に水タバコがある。客はカーットの真っ最中である。

延々と続く真夜中のカート・パーティー（カートは普通昼下がりにやるものだが、結婚式のカート・パーティーだけは徹夜になることもある）に飽きてそろそろ帰ろうとしていたほくらを夜中の二時に隣の自分の家まで案内し、キブダ（牛レバーの細切れため料理）をふるまってくれた。それから彼の勤める近くの警察署にも案内してくれた。

別れ際に「今日昼過ぎにまた遊びにおいで。もし酒があったら持ってきてくれないか」と言った。イエメンは禁酒国である。外国人が自分の家で秘かに飲むのは黙認されているが、外国人であれ、イエメン人であれ町なかで飲んでいたり、酒を持ち歩いていたら投獄されても文句はいえない。公的にはイエメンの町なかには酒があつてはならないのである。合法

的に飲めるのは外国人向けの数件のホテルのみで、ここには特別にライセンスが下りているが、ラマダーン（断食）月などには、これらのホテルでも酒が出せなくなる。しかしこれはあくまで外国人用で、イエメン人はどこにしようが酒を飲んではならないことになっている。これは法律というよりも、社会規範である。

とはいえ、酒の飲みたい人はどこにでもいるもので、サナアにも闇の密売ルートは存在している。だが、普通のイエメン人にとってはこうした密売ルートに接触することは、逮捕されたり罰金を払わされたりする危険もさることながら、非道徳的という評判が立つことのリスクが大きい。イエメンでは他人に「ケチだ」とか「欲張りだ」と噂されるよりも、「酒飲み」「墮落したイスラム教徒」という評判の立つほうが不名誉である。

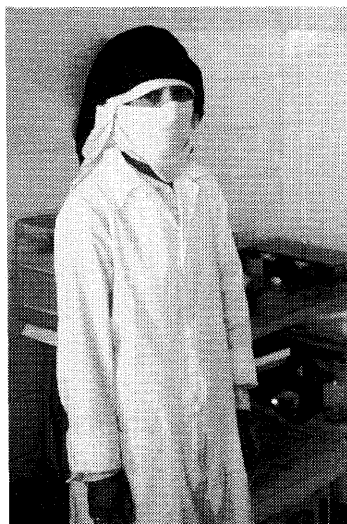
それでも酒を手に入れたければ、外国人とお近づきになるのが最も安全な方法である。酒の所持が見つかったも「外国人にもらった」と言えば、少なくとも密輸との関係はないことになる。外国人が自分用に一本だけ酒を持ち込むのは密輸ではないからである。

マンスールは酒の好きな男であった。外国に行く機会や外交官と接する機会の多い政府の高官なら、酒を大量に仕入れるルートをもっているだろうが、マンスールのような下級警察官にはそんなルートはない。だからわれわれのような外国人は格好のお友だちなのである。下心があったとはいえ、マンスールの親切にはほくらも感謝していたから、その日（金曜日である）

の午後、酒をかついで（もちろん嚴重にタオルに巻いて鞆に入れて）マンスールの家に遊びに行つた。

ぼくらは部屋に入るなりバラの香水を頭からふんだんにふりかけられた。最大級の歓迎の表現である。量が多いほど歓迎の大きさを示すのだから、服がびしょびしょになるほどかけられるのはあまり嬉しくない。部屋にはサウトじいさんという老人がいて、お盆を叩いて即興の詩を朗詠してくれた。いい声である。そのあとマンスールの既婚の妹のアーミナが出てきてぼくらと一緒にお茶を飲んでおしゃべりをした。彼女はぼくらの前でもベールを被らず（もちろんスカートはしているから髪の毛は見せないが）快活に話をしてくれた。こんなことは初めてであつた。娘たちもあとからおしゃべりに加わつたが、みな十歳ちよつとというところだろう、アミーラ、サミーラ、インティファも皆素顔を見せていた。なんて開放的な一家なのだろうと感心した。サナア旧市街の一画、四階の日当たりのいい明るい部屋で、とても心地よい一時であつた。奥さんのサブティはちよつとだけ現れたがおしゃべりには加わらなかつた。

次の週末に再びマンスールの家を訪ねると、マンスールは町なかのホテルに在るといふ。ホテルを訪ねていくと「家庭の事情で家にいられない」と言つた。そこで、マンスールとわれわれはアーミナの嫁ぎ先の家に行つた。アーミナの家は旧ユダヤ人街にあつて、一家はかつてユダヤ人が住んでいた家に住んでいた。イエメンはその昔ユダヤ教を国教としていた時期もあり、



イエメン人看護婦。白衣は万国共通である。

七世紀にイスラム教が生まれて国全体がイスラム教に改宗して以降も、数万人がユダヤ教徒として細々と生きてきたのである。彼らのほとんどは一九四八年のイスラエル建国のときに出国していった。

アーミナの家にはじいさんがユダヤ人だというアハマドもいた（ただし彼自身はイスラム教徒であった）。アーミナにまた香水の行水をさせられ、手製のパンやケーキをご馳走になる。看護婦の学校に通っているというアーミナの娘のサバーハもいる。彼女は十三歳で、ぼくらの前ではベールを外さなかったが、話題には積極的に加わった。

しばらくするとマンスールは「ちよつとタバコを買ってくる」と言っておいと出かけ、すぐにウイスキーの瓶（ジョニーウォーカーの赤ラベル）を抱えて帰ってきた。三軒隣で売っているのだと言う。一本二五〇リヤルだと言った。本当はぼくが持つていくことを期待していたのだろう。しかし、残念ながらぼくはイエメ

ンに来るときに酒を持ち込まなかった。先週の一本は友人のを拝借してきたのである。

いざ酒を飲む段になると、マンスールは女子供を部屋から閉め出した。酒を飲むところなど女子供に見せるものではないのだ。酒を飲んだ後、再び部屋に入ってきたサバーハとしばらく話した。彼女は、おじさんが酒を飲むのはもちろん良いことではないが、仕方がないと考えているようであった。「男はいいのよ。男なんだから。でもあたしたち女が飲んだら……」と言いながら彼女は右手の手刀で自分の首をはねる仕草をし、同時に舌と奥歯で鋭く「チッ」という音をたてた。この光景は、ぼくの脳裏にかなり鮮烈に焼きついている。看護婦学校に通うのは、現在のイエメンではかなり進歩的な女性である。その彼女が「男と女」の違いについてこんな風に認識している。自分をそんなふう閉じこめてしまっているのだ。ぼくには何も言う資格がないけれど。

ぼくの知らむところ、マンスールの「家庭の事情」は彼の飲酒癖にも一因があるように思えた。最初のとくに一緒に撮った写真を見せようと、次にマンスールの家を訪れたら家の人に「マンスール？そんな人はいないよ」と言われた。警察署でも見つけることができなかった。

まさか、女のアーミナをぼくが訪ねていくわけにもいかない。いったいマンスールはどこに行ってしまったのだらう。それは、ぼくがサナアに住み始めて四カ月目の出来事で、まだアラビア語がほとんどできなかったので、周りの人に何がどうなったのか尋ねることもままならな

った。

サウトじいさんのような歌うたい、アーミナのところで会ったアハマドのようなユダヤ系の人々は、いずれもイエメンの社会では低い階層の人々と認識されており、通常外国人はこうした人々と接する機会は少ない。イエメン社会のもう一つの側面をほくに垣間見せてくれたマンストールとは、いったい何者だったのだろう。たった二週間のつきあいで気のいいマンストールはどこかに消えてしまった。